幕末知識人の対外認識
——吉田松陰と『聖武記附録』『伊娑菩喩言』——

安藤信廣

Ⅰ　本稿の課題

「二〇世紀日本における知識人と教養―丸山眞男文庫デジタルアーカイブの構築と活用―」プロジェクト（略称「丸山眞男研究プロジェクト」）は、多くの成果を生み出してきたが、その一つとして、「一九四七年度「東洋政治思想史」講義原稿」の調査と翻刻が挙げられる。そのことにあたったのは、山辺春彦をチーフとする丸山文庫スタッフ、川口雄一、金子元、播磨崇晃であり、その成果の全体は『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』第九号（二〇一四年三月）三六頁以下に、掲載されている(1)。

「一九四七年度「東洋政治思想史」講義原稿」は、丸山眞男が東京大学法学部で行った一九四七（昭和二二）年度「東洋政治思想史」の講義原稿である。その内容を一言で言うならば、幕末・明治期の様々な思潮の交錯と相関を、思想の内在的自立的発展と社会的機能性の両面から考察したものと言えよう。

本稿は、丸山眞男研究プロジェクトの成果、ことに右の「一九四七年度「東洋政治思想史」講義原稿」を踏まえ、幕末知識人、特に吉田松陰（一八三〇―一八五九）の対外認識の形成に、漢語文献がどのような意味を持ったかについて検討したものである。幕末知識人の意識を検討したのは、それが二〇世紀日本における知識人及びその教養のあり方を検討するための視点を開示するだろうという見通しによる。主に漢文によって記されたアヘン戦争の記録や西洋についての知見、それらの膨大な知の広がりを基底に持つことによって、吉田松陰は幕末の政治思想に影響を及ぼすことになった。その内実の一端を、検討したい。

Ⅱ　丸山眞男「一九四七年度東洋政治思想史講義原稿」の指摘

丸山眞男が一九四九年度の東京大学法学部の日本政治思想史講義において幕末の諸思想に論究していることは、すでに知られている。それは『丸山眞男講義録』第二冊「日本政治思想史　一九四九」（東京大学出版会。一九九九年五月一七日）に詳しい。そこで丸山は、吉田松陰らを含む「尊王攘夷論」について、次のように述べている。

「前期的国民主義の最終段階。一口に尊王攘夷運動といっても、その思想的動機や政治的方向を仔細に分析すれば、そこには極めて複雑な内容が内包されており、相矛盾する契機が共存し、また錯綜して、到底単純な図式化を許さない。またそこに幕末の国民主義の「前期的」性格が現れているといえる。例えば尊王攘夷論は、しばしば佐幕開国論と対立させられる。しかし、現実には、「尊王」と「攘夷」、「佐幕」と「開国」という四つの契機は、縦横に結合されて、それぞれ別の方向に向けて展開されていたのである。すなわち、「佐幕攘夷」もあれば「尊王開国」もありえたのであり、また「攘夷」という言葉にも無数のニュアンスがあった。すなわち、そこには、単純な打払的攘夷から、実質的には開国論に等しい攘夷論（佐久間象山、吉田松陰、大国隆正ら）まで含んでいたのである。後者は、外国からの一方的な弾圧に屈した幕府の消極的攘夷に対して反対しようとしたものであり、積極的な攘夷という表現を取りながら、実質的には開国を主張したものである。[2]」

ここで丸山は、佐久間象山、吉田松陰らの論を「実質的には開国論に等しい攘夷論」「実質的には開国を主張したもの」と述べ、「幕府の消極的攘夷論」が事実上「当面を糊塗する弥縫策にすぎなかった[3]」ことに対置している。吉田松陰らの「攘夷論」の性格を指摘したものとして、現在でも首肯できる認識である。

これに対して、丸山はまたこうも述べている。

「のみならず、尊王と佐幕も必ずしも最初から両立しなかったのではなく、むしろ尊王論が倒幕論にまで到達したのは、幕末の最終段階であった。倒幕的意味をもった尊攘論を代表した吉田松陰も、初期の尊攘論には倒幕的意味はなかった。「幕府へ御忠節は別天朝への御忠節二つ無之候」（嘉永・安政初年まで）。安政五年、勅許をまたずして幕府が神奈川条約を調印した頃から急進化した[4]。」

丸山がここで述べていることは、「幕末の最終段階」において、そして吉田松陰において、「尊王論が倒幕論にまで到達した」という認識である。ただその際、「倒幕的意味をもった尊攘論」との表現もあり、「尊王論」と「尊攘論」という二つの用語を、あまり区別せずに用いているように見える。ここは、前段で「攘夷論」を区別して取りあげた以上、「尊王論」を取りあげていると考えるべきだろう。つまり、吉田松陰は「攘夷論」を主張することによって「（実質的）開国論」を唱え、

「尊王論」を主張することによって「倒幕論」にまで達したと、丸山は考えていたのだろう。ただ彼は、「尊王攘夷を単純に国民的統一と国民的独立という近代的国民主義と直接に連続するものとはなしえない所以もそこから自ずと理解される」[5]とし、「尊王」＝国民的統一、「攘夷」＝国民的独立という図式におちいることを避けたのであろう。「尊王」も「攘夷」も、近代的国民主義にそのまま連続するものではないことに注意を喚起したのである。

ところで、丸山眞男研究プロジェクトの調査・翻刻によって示された一九四七年度「東洋政治思想史」講義においては、（全体として一九四九年度と同様に慎重ではあるが）次のような明瞭な対比が示されている点に注目したい。

「かくして打払的意味での攘夷論は漸次対外的自由独立の主張（松陰！）へと移行し、これは明治以後の条約改正論へと連って行くのである（「独立不羈三千年来の大日本、一朝人の羈縛を受くること、血性ある者視るに忍ぶべけんや。那波列翁を起してフレーヘードを唱えねば腹悶医し難し」（北山安世宛書簡〔『吉田松陰全集』第九巻、岩波書店、一九三九年、三二六頁〕））。さうして攘夷論のかうしたいはゞ温和化と逆比例して、尊王論は急進化し、いはゆる「政令ノ帰一」といふスローガンの下に一切の多元的政治勢力の集中化への要請のシンボルとしての意味をます〳〵表面にうかび上らせて来た。[6]」

ここでは、吉田松陰において、「攘夷論」が「温和化」して「対外的自由独立の主張」となり、逆に「尊王論」は「急進化」して「多元的政治勢力の集中化への要請」となって行ったことが、鮮明に示されている。吉田松陰の「尊王論」と「攘夷論」についての、丸山の見通しが明示されているのである。それが近代的国民主義に直結しないことを、丸山は二年後の一九四九年度「日本政治思想史」講義で断るのであるが、逆に言うならば、（吉田松陰の）「尊王論」と「攘夷論」の中に、近代的国民主義が胚胎されていた、少なくとも近代的国民主義に連なる要素が存在していたことを、暗示していたと言えるだろう。つまり、「尊王論」「攘夷論」の展開の方向性を明瞭に示そうとしたのが一九四七年度「東洋政治思想史」講義原稿であり、それが近代的国民主義に直結してはいないことに注意を向けたのが一九四九年度「日本政治思想史」講義だったと位置づけることができるだろう。

Ⅲ　二度の長崎行と二つの書籍

吉田松陰の「尊王論」と「攘夷論」の変化を準備した要因は、当然複雑なものだったに違いない。その中で、いま特に注目したいのは、彼の対外認識であり、その形成の基礎になった文献である。松陰は偉大な読書家だった。従って一冊や二冊の書籍から松陰の思想を解明することは不可能なのであるが、それでも彼の対外認識にとって一定の意味を持った文献とその影響を検討することはできるだろう。

松陰は、その人生の節目に二度、長崎に旅している。一度目は、嘉

永三（一八五〇）年、松陰二一歳のとき、藩命による兵学修行のための遊学である。一〇ヶ月の予定だったが、体調を崩すなどのことがあり、四ヶ月ほどで帰郷している。二度目は、嘉永六（一八五三）年、二四歳のとき、第一次黒船来航（同年六月）に危機感を持った松陰が、海外の実情を調べるためにロシア船によって密航することを企て、江戸から単身で長崎に至ったものである。ロシア船が出港してしまっていたため企ては実現せず、松陰は江戸にもどる。三ヶ月の旅だった。

一度目の長崎行の折、松陰は猛烈な勢いで読書している。そしてその詳細な読書記録を、旅行記『西遊日記』の中に残している。その膨大な記録の中で、いま注目し検討しようとするのは、魏源著『聖武記附録』である。

二度目の長崎行に際して松陰は、格別な読書をしていない。ただ、このとき長崎で漢訳の『イソップ物語』である『伊娑菩喩言』に触れ、後年その全体を読むことになる。その体験が持った意味を、検討したい。

Ⅳ　魏源『聖武記附録』と松陰『西遊日記』

『聖武記附録』は、清朝後期の思想家魏源（一七九四―一八五六）の著書。『聖武記附録』という書物が単独で書かれたのではなく、それはあくまでも『聖武記』の附録だった。

『聖武記』一四巻は、清朝開創以来の軍事・軍功を記録したものである。康熙・乾隆の盛世の軍歴も冷静な分析の対象になっているが、嘉慶以後に頻発して来た内乱・外寇の分析などは冷徹と言って良い厳しさである。これは、アヘン戦争後の緊迫した状況の中で、実際に外敵・内乱にどう対処するかという問題意識に貫かれて記されたためであろう[7]。この書の一〇巻までは、歴史的な実際の戦争に即して記されているのに対して、第一一巻から第一四巻までの四巻は、「武事余記」との総称のもとに、テーマごとに問題を論じた部分となっている。さらに、この四巻の冒頭には、「附録」と記されていて、『聖武記』本体一〇巻と異質の、確かに著者自身によって「附録」と意識された部分であることが示されている。『聖武記附録』四巻は、アヘン戦争後の喫緊の課題を整理し、歴史的教訓から現在の必要事を明示しようとしたのであろう。

嘉永三（一八五〇）年八月二五日、萩を出発して長崎に向かった吉田松陰は、短い長崎滞在の後、九月一四日、平戸に至り、平戸藩家老葉山佐内に会い、翌一五日、葉山佐内から『聖武記附録』四巻を借りている。松陰の『西遊日記』九月一五日の条には、

「午後、葉山に至る。野元弁左衛門亦至る。談話夜に入る。聖武記附録四冊を借りて帰る[8]。」

とある。松陰は『聖武記』一四巻全体に関心を寄せたのではなく、『聖武記附録』四巻に関心を寄せたのだった。迫りくる西洋の圧力とどう対峙して海防を全うするか、という松陰の喫緊のテーマに、まさにこの『聖武記附録』四巻が応えるものだったからである。もちろんそれ

は松陰が最初から知っていたことではなく、葉山佐内から教示されたものだっただろう。一五日以後、松陰は連日のように葉山佐内宅を訪れ、『聖武記附録』を読んでいる。一七日の条には、こうある。

「十七日　晴。葉山に至り聖武記附録を読む。其の中の佳語、○徒知侈張中華、未覩寰瀛之大。（徒に中華を侈張するを知り、未だ寰瀛の大を覩ず。[9]）」

この部分については、既に指摘がある。桐原健真『吉田松陰――「日本」を発見した思想家[10]』は、この箇所を引いた後、

「（かつて外夷の巨砲大艦を恐れるに足りないとしていた）松陰は、まさに魏源によって指弾されているところの「徒に中華を侈張する」人間であった。彼は、魏源との出会いによって「寰瀛の大」すなわち地球規模の世界を知るべきことに思い至ったのである。[11]」

と述べている。この指摘は重要なものと言える。これにつけ加えるとすれば、松陰がこの短い語を『聖武記附録』の当該箇所、少なくとも当該段落全体を承けて、「佳語」として抄録したのだということである。当該部分は、『聖武記附録』巻十二「武事余記・掌故考証」中にある。[12]当該段落は、冒頭に、次のようにいう。

「儒者著書、惟知九州以内。至塞外諸藩則若疑若昧、荒外諸服則若有若無。」

（儒者の著書は、惟だ九州以内を知るのみ。塞外諸藩に至りては則ち疑わしきが若く昧（くら）きが若し。荒外の諸服は則ち有るが若く無きが若し。）

儒者の書いた書物は、中国の境域内のことしか知らない。境域外の服属国については曖昧であり、それよりも外の異域については、あるのか無いのかさえはっきりしないようなありさまだ。魏源はそのように「儒者」の世界認識の狭さを批判し、旧来の書物の地理記述の荒唐無稽さを執拗に列挙している。そのうえで、

「故欲知西荒厓略者、上則宜拠利瑪竇・南懐仁地図、近則宜観『海国図志』。」

（故に西荒の厓略（がいりゃく）を知らんと欲する者は、上は則ち宜しく利瑪竇・南懐仁の地図に拠るべく、近くは則ち宜しく『海国図志』を観るべし。）

と述べる。西方僻遠の地のおおよその状況を知ろうとするならば、古いものではイタリア人利瑪竇（マテオ・リッチ）[13]らの地図、新しいものでは私（魏源）の『海国図志』を見るべきだ、というのである。こうした文脈の最後に、右の重要な言葉、「徒に中華を侈張するを知り、未だ寰瀛の大を覩ず。」という言葉が出てくるのである。吉田松陰は、この全体を理解した上で右の魏源の言葉を抄録したことに注意する必要がある。つまり、「儒者」の世界認識、対外認識の誤りを根底的に覆す必要性、依拠すべき知見は西洋の側にあることを、このとき松陰は見ていたのである。

松陰は、右の語を「佳語」としただけではない。すぐに続けて、次の語も抄録している。

「夫制馭外夷者、必先洞夷情。今粤東番舶、購求中国書籍、転訳

夷字。故能尽識中華之情勢。若内地亦設館於粤東、専訳夷書・夷史、則殊俗敵情、虚実強弱、恩怨攻取、瞭悉曲折。於以中其所忌、投其所慕、於駕馭、豈少補哉。」

（夫れ外夷を制する者は、必ず先ず夷情を洞る。今　粤東の番舶は、中国の書籍を購求し、夷字に転訳す。故に能く尽く中華の情勢を識る。若し内地も亦た館を粤東に設け、専ら夷書・夷史を訳せば、則ち殊俗・敵情、虚実・強弱、恩怨・攻取、瞭悉曲折。於りて以て其の忌む所に中り、其の慕う所に投ずれば、駕馭において、豈に少補ならんや。）

外夷を制しようとするなら、外夷の実情に洞通していなくてはならない。粤東（広東）に来る「番舶」（南蛮船。西洋の船）は、さかんに中国の書籍を購入し、それを自国語に翻訳している。だから中国の情勢を良く知っている。こちらでも広東に翻訳館を設けて外夷の書籍・歴史などを訳せば外夷の実情が分かり、彼らを「駕馭」する（思いのままに使役する）のに大いに役立つだろう。このように言う魏源の言葉を、松陰は抄録しているのだが、それは、中央の礼部に属する「四域館」「百夷館」の漢訳文書が不完全で、「厓略」（概略）しか分からない状態であるのに対し、「近則西洋英吉利亦能以漢字通於中国」（近くは則ち西洋・英吉利も亦た能く漢字を以て中国に通ず）という状態なのだという現実認識が前提にあったのである。「夫れ外夷を制する者は、必ず先ず夷情を洞る。」という右の魏源の言葉は、後の松陰の下田密航事件（及びその前の長崎ロシア船密航未遂）を考えるうえで極めて重要なのだが、その前提として自国の外国語翻訳能力の劣弱、翻訳体制の不備、そこから来る対外認識の欠落全体に、魏源は危機感を持ち、松陰はその認識を継承しているのである。松陰が、自己の対外認識の欠落を痛感しただけではなく、自国の（魏源にとっては中国の、松陰にとっては日本の）対外認識の欠落を痛感していることを知ることができるだろう。

一七日の抄録はほかにもあるが、省略する。『西遊日記』翌一八日の条にも、「晴。聖附録の議武を読む。」とあるので、『聖武記附録』巻一四「武事余記・議武五篇」を読んだことが分かる。一八日は巻一四「議武五篇」を読んでいる。

翌一九日から二四日にかけて、松陰は『聖武記附録』をふくむ諸書を読んでいるが、二四日はことに集中的に読書し抄録をしている。諸書からの一大抄録である。『聖武記附録』に限って言えば、巻一四「議武五篇」のうち「軍政」篇、「軍儲」篇から抄録している。「軍政」篇からは次のような箇所がみえる。

「嘉慶中勦海盗、皆先雇同安商艘、継造米艇霆船、未有即用水師之船者。今即実估実造、而停泊不常駕馭。」

（嘉慶中　海盗を勦するに、皆先ず同安の商艘を雇い、継いで米艇霆船を造り、未だ即ち水師の船を用いる者有らず。今は即ち実に估い実に造るも、而も停泊して常に駕馭せず。）

嘉慶年間には「海盗」との戦いに同安の商船を雇って使っていて、「水師」（海軍）の船は使わなかった。今では実際に軍船を買ったり

作ったりしているが、停泊しているだけで、ほとんど使用しない。魏源は、これでは船は腐ってしまうから、運搬船は海運に用い、軍船はその護衛に任じて日常的に鍛錬すべきだと続けている。松陰も、その部分まで抄録している。ただこれも、抄録の前の部分を見ると、「西夷之海艘、堅駛巧習」（西夷の海艘は、堅駛巧習す）であるのに対して、「中国之師船、苟無海賊之警、即終年停泊。」（中国の師船は、苟も海賊の警無くんば、即ち終年停泊す。）という状態だという指摘がある。「故」に「嘉慶中」には、「海盗」との戦いに同安の商船を雇うようなありさまだった、と続いていたのである。松陰は、その文脈全体を踏まえて抄録している。

同日にはまた同じく「軍政」篇から、次の部分を抄録している。

「呉淞天津砲台、不近扼内港、皆遠置於口門之外。洋面之衝、樹鵠以招敵、使敵得以活砲攻呆墋。而我反以呆砲撃活船。故賊百攻百中、而我十発九虚。何如移諸港内岸狭之処、使夷船不得如外洋之横恣、而我得以呆砲撃呆船乎。」

（呉淞天津[14]の砲台は、近く内港を扼せず、皆　遠く口門の外に置く。洋面の衝は、鵠を樹てて以て敵を招き、敵をして活砲を以て呆墋を攻むるを得しむ。而して我は反って呆砲を以て活船を撃つ。故に賊は百攻百中し、而して我は十発九虚なり。何ぞ諸を港内の岸狭の処に移し、夷船をして外洋の横恣の如きを得ざらしめ、而して我をして呆砲を以て呆船を撃つを得しむるに如かんや。）

呉淞（ウースン）の砲台は、内港を扼せず、港口の外に置かれていた。外洋に面した要衝は、的を立てて敵を招いているようなもので、敵には「活砲」（活きて動いている大砲。艦載砲をいう）で我が「呆墋」（じっとして動かない砲台）を攻撃することを可能にさせてしまった。そして我が方は逆に、「呆砲」（じっとして動かない大砲。砲台砲をいう）で「活船」（活きて動いている船。イギリスの軍艦をいう）を攻撃することになった。だから賊の大砲は百発百中で、味方の大砲は十発撃っても九発当たらないというありさまだった。従って、この砲台を港湾内の切り立って狭い場所に移し、外夷（直接にはイギリス）の船に外洋のような自由な動きができないようにさせ、我が方は動かぬ砲台砲で動けぬ敵艦を砲撃するようにすべきだろう。

右のような魏源のやや長い文章を、松陰はすべて書き写している。彼がこの箇所に特に注目していることが伝わってくる。松陰がなぜここに注目しているのかというと、桐原健真が言うように、「このことは、松陰が信頼していた和流砲術や伝統兵学に対して、完全な敗北を宣告するものでもあった[15]」からである。松陰は、この部分を、恐らく艦砲の優位性を示すものとしてとらえたのであろう。ただ、魏源は、この直前の部分に「禦海寇、但有守内河之法、無守海面之法、而」（海寇を禦するには、但だ内河を守るの法のみ有りて、海面を守るの法無し。而して）とある通り、砲台を内河防禦に向けるべきだということが主張の中心だった。松陰は、その部分は筆写せず、そのことによって、固定砲台よりも艦砲の優位を示すものとしてこの部分を筆写したのだろう。

この後にも、松陰は『聖武記附録』を抄録しているが、省略する。また、一〇月一二日には、「葉山にて聖武記を読む。」、一三日には、「葉山にて聖武記。」とあり、『聖武記』本体を読んでいるように見えること、他にも西洋事情を伝える様々な書籍を読んでいたことをつけ加えておく。

ともかく、右に見た『聖武記附録』への松陰の尋常でない注目は、若き松陰の対外認識を広め、且つ深めたに違いない。『聖武記附録』をふくむ『聖武記』が日本に伝わったのは、『魏源全集』第三冊『聖武記』「校点説明」には「『聖武記』自道光三十年（日本嘉永三年）伝入日本後、……」とあり、つまり嘉永三（一八五〇）年、まさに松陰が長崎・平戸を訪れたその年だった。従って葉山佐内と吉田松陰は、日本で最初に『聖武記』及び『聖武記附録』を読んだ日本人だったと言える。しかも右に見たように、『聖武記附録』が松陰に投げかけた問題は、多様で重層的だった。松陰の「攘夷論」が、その当初から『聖武記附録』等による広い対外認識を持っていたことは、その後の「攘夷論」の変容を準備するものだったと言えよう。

茂木敏夫は、「『海国図志』成立の背景――中国社会の変動と経世論」（洋学史学会編『洋学』第一九・二〇合併号。二〇一五年）で、魏源が『海国図志』と『聖武記』を並行して編纂していたことを述べ、「両書の編纂は、内陸世界に空前の版図を拡大した聖なる武功の記録と、海洋世界やそこへの西夷の進出に関する情報の収集という、内陸と海洋とに関する、一対の作業だったと考えることができるだろう。……内陸の眼差しと海洋の眼差しとの接続とをここにみることができる。」という。そして次のように続ける。

「その際、この接続のありようとして、序に述べた『海国図志』編纂の意図、「夷の長技を師として夷を制せんがために作る」は重要な意味をもっていた。ここでいう「夷の長技」が何を、どこまで含むものであるかは議論の余地があろう。しかし、この論理を拡大させていくことによって、「師として」受容する内容を、西洋の軍事技術から民生技術へ、さらに思想や政治制度へと広げていくことが可能となる。魏源のこの言葉は、そのための突破口になりうるものだった。内政問題に向けられていた林則徐や魏源らの形成改革論の眼差しは、海洋世界へと拡大することで、西洋モデル受容の可能性までも射程に入れるにいたったのである。[17]」

茂木のこの指摘を本稿の問題につなげて見るならば、嘉永三年の吉田松陰が平戸で『聖武記附録』及び『聖武記』に触れたとき、「西洋モデル受容の可能性」にまでつながる視点そのものが、松陰の中に根差したというべきだろう。それが松陰の「攘夷論」を変容させていく根源的な力の一つになったであろう。

V　松陰と『イソップ物語』

松陰は『イソップ物語』を漢文で読んでいた。『伊娑菩喩言』[18]である。『伊娑菩喩言』については、すでに新村出博士に論考がある。「『伊曽

保物語』の漢訳」（「明星」大正一五年一月）[19]が、それである。その中に、次のようにいう。

「ともかくも此の漢訳本『意拾喩言』の系統本は、幕末嘉永安政年間に至って、日本に伝来した。駿河田中藩の増田貢その号を岳陽といった人の写した『伊娑菩喩言』と題する写本を岡崎桂一郎博士の蔵本によって大正初年に見たことがあるが、それには長州の宍戸璣（山県半蔵、号世衡）が安政三年丙辰陽月に跋を加へたものと、又安政四年十一月二十日吉田松陰が再跋を施こしたものを書加へてある。私はそれらの跋文のない普通の写本を蔵してをる。」

この文章から明らかなように、『意拾喩言』は一八四〇年に広東で出版されたのだが、その系統本である『伊娑菩喩言』は、安政元（一八五四）年頃の日本に写本の形で伝来したのだった[20]。また宍戸璣の跋文は、次の通り。（原漢文。新村出博士前掲書の訓読文による。）

「喩言七十三条、蓋し英人の訳する所にして上海施医院の活字刷板に係る、其の地名を挙げ時世を説くや皆之を支那に仮る、是れ訳者の苦心する所なり、此の書未だ清舶の售販を経ず、某氏の嘗て之を俄艦中に獲たる所と云ふ。亦罕覯の珍籍なり、余借覧数日乃ち謄して之を篋す。宗本間間（まま）人物飛走を図す、今謄写に不便なるを以て尽く之を削る。」

吉田松陰は『伊娑菩喩言』を意図的に求めていたらしい。その跋文（再跋）の中に、「吾曽てその馬鹿同遊の一則を遐邇貫珍の中に見」たという。「馬鹿同遊」というのは、『イソップ物語』の寓話の一つ。『遐邇貫珍』は、一八五三年に中国で発行されていた月刊紙で、西洋事情等を紹介していたために、長崎を経て日本国内にももたらされていた[21]。その中に「馬鹿同遊」のイソップ寓話が紹介されていたので、松陰はそれを読み、イソップ寓話に関心を持ったのだった。

では松陰がイソップ寓話を最初に「『遐邇貫珍』の中に見」たのはいつなのか。それは後に引く松陰自身の跋文によれば、長崎においてだった。嘉永三（一八五〇）年の一度目の長崎・平戸行のときには、『遐邇貫珍』そのものが刊行されていないから、いうまでもなく嘉永六（一八五三）年冬の、二度目の長崎行のときである。『遐邇貫珍』の刊行が一八五三年であったのだから、松陰は刊行直後の同紙を見て、そこに掲載された『伊娑菩喩言』の寓話を最初に見た日本人だったといえる。

吉田松陰が『遐邇貫珍』の中で見て関心をもった「馬鹿同遊」の寓話とは、どのようなものであろうか。この寓話は、『伊娑菩喩言』には「馬思報鹿仇」（馬　鹿の仇を報ぜんと思ふ）との題で載っている。

「霊台上、馬鹿同遊。其馬常受鹿欺。積怨於心、無以報復。自思必須人力、方可雪恨。乃求一武夫曰、馬受鹿欺久矣。此恨難消。求壮士為我報仇。馬当終身図報。武夫曰、汝欲伸冤、須言聴計従、任我駆使、乃可。馬曰、得君相帮、水火不避、無不応承。武夫遂置鞍蹬、繋其身上、又以鉄環啣其口、従此騎而鞭之。報仇之約、絶不提及。馬悔曰、前受鹿欺、尚不能忍。今受人騎、終身僕僕、

悔無及矣。甚矣、人力之不可籍也。」

（霊台の上、馬鹿（ばろく）　同に遊ぶ。其の馬　常に鹿の欺りを受く。恨みを心に積むも、以て報復する無し。自ら思ふ「必ず人力を須（ま）ちて、方（まさ）に恨みを雪ぐべし」と。乃ち一武夫に求めて曰く、「馬　鹿の欺りを受くること久し。此の恨み消え難し。壮士の我が為に仇を報ゆるを求む。馬当に終身　報いんことを図るべし」と。武夫曰く、「汝　冤を伸べんと欲せば、須く言聴き計従ひ、我が駆使に任（ま）かすべくんば、乃ち可なり」と。馬曰く、「君が相ひ帮（たす）くるを得ば、水火も避けず、応承せざる無し」と。武夫　遂に鞍蹬を置き、其の身上に繋ぎ、又　鉄環を以て其の口に啣（は）ましめ、此れより騎りて之を鞭うつ。仇を報ずるの約は、絶えて提及せず。馬悔やみて曰く、「前には鹿の欺りを受け、尚ほ忍ぶ能はず。今　人の騎を受け、終身僕僕たり、悔ゆるも及ぶ無し」と。甚だしいかな、人力の籍（か）るべからざるや。）

『イソップ物語』の寓話の最後には、〝教訓〟が付されていることが多い。この寓話の〝教訓〟は、「甚だしいかな、人力の籍るべからざるや」だった。日本国内で対立し合っている勢力の一方が欧米列強に妥協し援助を求めるなら、列強に侵略の口実をあたえ、彼らに支配されることになる、だから列強の介入を許してはならない――という〝教訓〟を、松陰はこの寓話から読みとっていたのであろう。

松陰が『伊娑菩喩言』写本に記した跋文（再跋）の全文は、次の通りだった。（新村出博士前掲書による。句読点のみ、引用者が改めた。）

「世に欧学を修むる者僉（みな）曰く、西洋人は仁なり、未だ曽て禍心あらざる也と。若し此書を観せしめば豈茫然自失せざらんや。吾曽てその馬鹿同遊の一則を遐邇貫珍の中に見て、之を長崎近聞の後に書せしの後、世衡（宍戸璣）頃日その全七十三則を見示す。把つて之を閲するに、その斧頭求柄は甚だ下田・箱館の事に似仮せざるや。猟戸逐兎は甚だ手を米利（アメリカ）に借りて羅（オロシア）を援け以て諳（イギリス）・払（フランス）を拒ぐの策に類せざるや。其の他、鴟狐狼犬の諸則、自謀騙人、一にして足らず。因つて岡部生（富太郎、利済、子揖）をして写さしめてこれを蔵す。西洋人は仁なりと云ふ者の口を執らへんと欲する也。安政四年十一月二十日、二十一回生跋[22]。」

「斧頭求柄」の寓話は、幕府が下田と箱館（函館）を開港したことに似ているし、「猟戸逐兎」の寓話は、アメリカの力を借りてロシアと組みイギリス・フランスを排除しようとするやり方に似ている。そう吉田松陰はいう。

松陰が跋文の中で触れていたもう一つの例「斧頭求柄」を見てみよう。

「昔有斧頭、雖鋭而無用。自思必得一柄、方可見用於世。乃乞其樹曰、先生賜我一木。不過僅為一柄足矣。他日自当図報。其樹自顧枝柯繁盛、何惜一柄。慨然与之。斧得其柄、所有樹林尽被伐去。何其樹之愚哉。如世人所謂助虎添翼、又云、遞刀乞命、是也。凡人必須各守其分、切勿尺寸与人。誠恐有如斧柄、則悔之晩矣。」

（昔　斧頭有り、鋭しと雖も用無し。自ら思ふ「必ず一柄を得ば、

方に世に用ひらるべし」と。乃ちその樹に乞ひて曰く、「先生　我に一木を賜へ。僅に一柄を為るに過ぎずして足らん。他日自ら当に報を図るべし」と。其の樹自ら顧るに「枝柯の繁盛すること、何ぞ一柄を惜しまんや」と。慨然としてこれに与ふ。斧　其の柄を得るや、有る所の樹林　尽く伐り去らる。何ぞ其の樹の愚なるや。世人の所謂「虎を助けて翼を添ふ」、又云ふ、「刀を遁して命を乞ふ」が如きもの、是れなり。凡そ人　必ず須く各々其の分を守るべし、切に尺寸も人に与ふる勿かれ。誠に恐る斧柄の如き有らば、則ち悔ゆるも晩し。）

斧の頭が、林の樹にむかって、斧の柄となる枝をいただきたい、と頼む。その樹が一枝をあたえると、斧は林の樹木すべてを切りたおしてしまった――という寓話だが、この寓話を松陰は、「甚だ下田箱館の事に似仮せざるや」と読んでいる。安政元（一八五四）年の日米和親条約、それに続く日英、日露和親条約等のことをいうのであろう。わずかに下田・函館を開港してやるだけのことと考えている日本に対して、西欧列強はそれをテコにして日本全体を支配しようとしている、という松陰の認識を明瞭に見てとることができる。

この文章は、〝教訓〟の部分が寓話の本文とほとんど同じ長さになっている。渡部温『通俗伊蘇普物語』（明治六年刊）第四五話「樹と斧の話」はこれと同じ寓話だが、そこでは、〝教訓〟は、「他の不為は吾不為といふ事を知れ」と、簡単である。これに対して、『伊娑菩喩言』の方では、二つのことわざと、二条の教訓が連ねられている。最初の教訓「凡そ人　必ず須く各々其の分を守るべし」というのは、「分」という語を通常理解されている「分際」「分限」という意味で理解すると、「自分の分際を守れ」「出過ぎたことはするな」という意味になる。しかしそれでは意味が通らない。すぐ続いて「切に尺寸も人に与ふる勿かれ」わずかなものでも他人に与えるな、と言っている。そこにつながる文脈であれば、「凡そ人　必ず須く各々其の分を守るべし」というのは、「自分の権限を守れ」という意味であろう。つまり、「分」は「権限」「権利」の意味でなくてはならない。ここで「分」と言っているのは、個人・国家の「権利」を意味しているのである。

ここでもう一度丸山眞男「一九四七年度「東洋政治思想史」講義原稿」に引かれた、松陰の北山安世宛、安政六（一八五九）年四月七日付書簡を見直したい。そこには「幕府遂に人なし」「外夷控駁最も其の宜しきを失ひ」であるとの認識が語られ、「華盛頓がどこにあるやら、龍動が如何なる処やら、画そらごとにて何の控駁を能くなさんや。」と、『聖武記附録』の「夫れ外夷を制する者は、必ず先ず夷情を洞る」という言葉と同じ思考を記している。それ故、「徳川存する内は遂に墨・魯・暗・払に制せらるることどれ程に立ち行くべくも計り難し」と、徳川幕府の打倒を明瞭に見据えている。この後に、丸山が引いた「独立不羈三千年来の大日本、一朝人の羈縛を受くること、血性ある者視るに忍ぶべけんや。那波列翁を起してフレーヘードを唱えねば腹悶医し難し」という言葉が出てくる。ここで松陰は明瞭に「フレーヘード」すなわち「自由」という語を用いている。もちろん、「自由」とい

う訳語が存在していないので「フレーヘード」というオランダ語をそのまま使っているが、「人の羈縛を受くること」をはねのける国家の「自由」、自国の「独立不羈」の基礎となる国家的「権利」の概念を、未分化な状態であったとしても松陰が把握していたことを確認しなければならない。

そうであれば、松陰は『伊娑菩喩言』から、西洋人の「自謀騙人」の姿だけを見ていたのではない。そこに含まれる西洋の思想の一部を理解していただろう。「凡そ人　必ず須く各々其の分を守るべし」の「分」を、松陰は「権利」の概念を表す語として理解していただろう。

Ⅵ　吉田松陰の対外認識

池田敬正は、「倒幕思想の熟成」（荒木繁編著『日本の思想』下、一九八〇年一二月一五日、新日本出版社）の中で、こう述べている。

「その松陰が、ほかならぬ幕末の思想家としての姿を現わしはじめたのは、一八五〇（嘉永三）年の平戸遊学からである。この平戸遊学は、松陰が封建的な家学の継承者としての研鑽をつむためではあったが、同時に海外に開かれた唯一の窓口であった長崎を訪れ、オランダ船まで見学するという体験をしている。つづいて翌年、藩主に従って江戸に留学し、佐久間象山の門で洋学を学ぶこととなった。これらの行動は、かれ自身の対外問題への関心の結果であったが、同時に現実への開眼ともなり、アジアに迫っている世界資本主義の波が、日本にも迫っていることを、松陰は理解しはじめたのである。[23]」

その危機の認識と同時に、開かれた対外認識、西洋認識を、松陰が早くから自己の内部に育てていたことを、本論では述べた。そしてそれが、彼の「攘夷論」を次第に変容させる力となったことを指摘した。

吉田松陰は、〈西洋〉からの外圧に抗するために「攘夷」の思想を強める一方、〈西洋〉について知らねば〈西洋〉と対決できないとして、アメリカへの密航を企てた。その矛盾にみちた行動の中に、松陰の内面的課題が見える。

佐久間象山という「開国」主義者に師事した松陰の、いわば「開明的」対外認識は、象山と出会うよりも前、嘉永三年の第一次長崎・平戸行において培われていたといえよう。またそれは、嘉永六年の第二次長崎行で一層育って行ったと考えられる。『伊娑菩喩言』の全体を吉田松陰が読むのは、安政三（一八五六）年から同四（一八五七）年にかけての頃である。その読解の方向は、主に彼の「攘夷」論を強めるものだった。しかし実はその基底において、「攘夷」論から紙一重の所に、開かれた対外認識を胚胎させていたのである。

注

（1）一九四七年度講義原稿の本文は、四六頁から一三六頁まで。その後に、「一九四五年度「東洋政治思想史」講義原稿」が付されている。また、この原稿の資料的価値と意義については、同報告三七頁以下に、宮村治雄・山辺春彦の

詳細な「解説」が付されている。

（2）『丸山眞男講義録』第二冊、七九-八〇頁。なお、この後に続けて、「このことを裏返していえば、井伊直弼に代表される幕府の開国論は実質的には鎖国論であり、思想的には保守的な性格を有していたといえる。」と述べられている。

（3）同上書八〇頁。

（4）同上書八〇頁。

（5）同上書八一頁。

（6）「一九四七年度「東洋政治思想史」講義原稿」『丸山眞男記念比較思想研究センター報告』第九号、五二頁。「那波列翁」は、「ナポレオン」の漢語音訳。「フレーヘード」は、「自由」のオランダ語。

（7）『聖武記』に道光二六（一八四六）年魏源自身が付した識語の冒頭には、「是記当海疆不靖時、索観者衆。随作随刊、未遑精審。」（是の記（『聖武記』）は海疆の靖からざる時に当たり、観るを索むる者衆し。随いて作り随いて刊し、未だ精審するに遑あらず）とある。沿海地域の不安から、この書を見たいと期待する人々が多数いたことが分かる。

（8）『吉田松陰全集』第一〇巻、三五頁。山口県教育会編、岩波書店、昭和一四年一月一七日。平成一三年一月二〇日復刻、マツノ書店。

（9）前掲『吉田松陰全集』第一〇巻、三五頁。

（10）桐原健真『吉田松陰――「日本」を発見した思想家』、四三頁。筑摩書房、二〇一四年一二月一〇日。

（11）同上書四四頁。

（12）『聖武記』は、岳麓書社刊『魏源全集』第三冊による。頁数は同書の頁である。

（13）利瑪竇は、イタリア人、マテオ・リッチ（Matteo Ricci　一五五二―一六一〇）の中国名。イエズス会の宣教師で、明の万暦八（一五八〇）年中国に入り、キリスト教及び西洋科学を中国に伝えた。南懐仁は、ベルギー人、フェルディナント・フェルビースト（Ferdinand Verbiest 一六二三-一六八八）の中国名。イエズス会の宣教師で、清朝初期に活動し、主に天文・地理学によって重視された。

（14）「天津」とあるが、『魏源全集』第三冊『聖武記附録』五六二頁では、「東西」となっている。

（15）桐原前掲書四五頁。

（16）『魏源全集』第三冊『聖武記』「校点説明」一頁。

（17）茂木敏夫「『海国図志』成立の背景――中国社会の変動と経世論」一五八頁。茂木は、「夷の長技を師として夷を制せん」というフレーズが、すでに「西洋が日常化していた広東社会」にとっては違和感のある言葉だった点を指摘している。そして「こうした広東の眼差しにも留意すること」の重要性をも指摘していることを、特に注記しておく。

（18）『伊娑菩喩言』は、清の道光二十（一八四〇）年、広東において刊行された『意拾喩言』から出た一本である。『意拾喩言』は、「蒙昧先生」、「懶惰生」と自称した英人ロバート・トーム（Robert Thom）が、英語版より訳出した。

（19）『新村出全集』第七巻（筑摩書房、一九七三年六月）に収載。本文は、それによる。

（20）この書の刊本に対する関心は、吉田松陰の周辺で強かったものと思われる。それが日本にもたらされたのは、文久二（一八六二）年、幕府派遣の千歳丸に乗りこみ上海を訪れた高杉晋作によってであった。松陰刑死から三年後である。この事実については、内田慶一「イソップの東漸」補遺――「上海施医院」その他」（『関西大学中国文学会紀要』第一七号、一九九六年三月）に詳しい。なお、それと同一刊本の上海施医院蔵板『伊娑菩喩言』をオランダ、ライデン大学漢学研究所図書館で見出したことについては、拙稿「『イソップ物語』受容の一側面――『伊娑菩喩言』の日本における受容について――」（『東京女子大学比較文化研究所紀要』第七二号、二〇一一年一月）で述べた。

（21）英語名を「The Chinese Serial」という。ロンドン伝道教会の英華書院が発行した漢字月刊紙で、中国と西欧の事情を伝えたもの。

（22）「二十一回生」は、吉田松陰の自号。

（23）池田敬正「倒幕思想の熟成」二〇四頁。

〈追記〉

本稿は、本プロジェクト第一回研究会（二〇一二年一〇月一二日）における報告「幕末の『イソップ物語』の読まれ方―中国との比較にも触れて―」に基き、その際に御指摘いただいた点をふまえて制作したものである。同研究会においては各位から貴重な御意見をいただいた。また魏源に関しては、本プロジェクトメンバーの茂木敏夫氏より御教示をいただいた。あわせて感謝申し上げる。